

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：

「アジア文字研究基盤の構築 1：文字学に関する用語・概念の研究」公開ワークショップ「チベット・ビルマ系言語の文字学」&平成 29 年度第 3 回研究会

日時：平成 30 年 2 月 17 日（土曜日）午後 13 時 30 分より午後 17 時、2 月 18 日（日曜日）午前 8 時 30 分より午後 16 時

場所：AA 研マルチメディア室（304）

報告者名（所属）

2 月 17 日

1) 荒川 慎太郎（AA 研所員）

「チベット・ビルマ系言語の各種文字」

(Scripts of Tibeto-Burman Languages)

公開ワークショップに先立ち、本課題「アジア文字研究基盤の構築 1：文字学に関する用語・概念の研究」の紹介を行った。続いて、今回のワークショップの前提となる、「文字と音声言語とのかかわり」「チベット・ビルマ語派の話される地域と同語派の言語特徴」「アジアの文字体系からみた、チベット・ビルマ語派の文字」についての概説を行った。チベット・ビルマ語派は、漢字系・インド系・ラテン文字系・独自系などの、様々な類型・システムの文字体系で表記されることを確認した。

2) 孫 伯君（AA 研客員教授，中国社会科学院）

「西夏文字」

(Tangut Script)

西夏文字は、11～13 世紀に中国西北に話された西夏語（チベット・ビルマ語派の最北端に位置する）を記した「疑似漢字」型の文字である。話者・文字使用者が絶えたため、後世の学者の解読によって知られる。この西夏文字についての概説を行った。西夏時代に編纂された西夏語・漢語対照語彙集『番漢合時掌中珠』、最近発見された「西夏文字部首の一覧表型資料」などの文献の紹介を行ったのち、漢字の「六書」に倣った西夏文字の分析を、豊富な例とともに解説した。

3) 黒澤 直道（AA 研共同研究員，國學院大學）

「ナシ文字」

(Naxi Script)

中国西南部に居住するナシ族（納西族）には、複数の特徴的な文字が見られる。ナシ象形文字とも呼ばれるトンバ文字、ゴバ文字、ラルコ文字、マリマサ文字などである。本報告ではこれらを概観した上で、特にその中のトンバ文字について、造字と運用上の特徴を紹介した。特に運用面では、言語上の単位との非対応性や、絵画的な配置を優先したために起こる線状性の違反、同一テキストの中での文字種の異なる文字の混用などが、トンバ文字の著しい特徴的として見られることを述べた。

4) 岩佐 一枝（日本学術振興会）

「ロロ文字」

(Yi (Lolo) Script)

彝文字（ロロ文字）は、ピモと呼ばれる彝族の祭司が代々継承してきた文字体系で、明代にはすでに成立していたとされる。この彝文字によって書き表されている言語は、彝語、あるいはロロ語と称され、チベット・ビルマ語派、ロロ・ビルマ語支に属す。元々表語文字であったと考えられている彝文字は、各集落で「仮借」が進み、現在各地で表音節文字へと変化している。この仮借に加え、彝文字が漢字のような超方言的の文字体系ではなく、ピモ個人の自由裁量によるところが大きい表記体系であることを指摘し、多くの異体字が生まれた過程について示した。

5) 澤田 英夫 (AA 研)

「ビルマ系言語の文字」

(Scripts for Burmish Languages)

本発表での「ビルマ系言語」とは、TB 語派ロロ＝ビルマ語支ビルマ語群の言語を指す。ビルマ系言語を表記する文字のうち、ビルマ文字は 12 世紀頃モン文字を受容してビルマ語の表記に流用した結果生じたものであり、民族集団カチンの成員が話すロンウォー語・ラチッ語・ンゴーチャン語・ツァイワ語のローマ字正書法は、カチンの多数派の言語であるジンポー語の正書法の影響のもと 1960 年台以降に作られた。また、言語的にはカチンに近いが民族としてはシャンの一派であるタイ＝サー族の文字は、ビルマ文字をもとに作られたシャン文字を改変してごく最近作られた。このことは文字の選択に文化的な要因がウエイトを占める好例と言ってよい。

公開ワークショップには、共同研究員・ゲストスピーカーを含め、50 人弱という多数に参集していただくことができた。文字に関心のある一般の方も多数参加し、質疑も充実したものになった。

2 月 18 日

6) 全員

参加者からの、学会・研究会・市民講座などの情報を共有し、本課題の成果公開に関する打ち合わせを行った。

7) 岩佐 一枝 (日本学術振興会)

「ロロ文字」

(Yi (Lolo) Script)

まず、彝文字（ロロ文字）は、代々これを伝え、用いていた祭司のパーソナルユースに特化したものであり、コミュニケーションツールではなかったという点を指摘し、このため、たとえピモの協力を得たとしても、文献解読は容易でないという現状を述べた。その後、発表者がこれまで解読してきた彝語北部方言、南部方言、東南部方言の文献について実例を挙げ、内容の一部を紹介した。また、文献解読においては、最初に方言同定を正確に行うことが最重要となるが、その際、字体や字形だけで安易に判断するのではなく、文意、異体字の検証など総合的に判断する必要性があることを説明した。

8) 清水 政明 (AA 研共同研究員, 大阪大学)

「チュノム」

(Chu Nom)

チュノム（かつて国語、国音、南音とも呼ばれた）の定義と種々の分類案を示した上で、報告者の考える内部構造に基づく分類案（仮借・会意・会音・形声）を示した。中でも会意の数が極めて限られることから、個々の文字は基本的に表音要素を含むことを指摘した。次いで、その構造を理解する上で必要な概念（省声・省略・改音符号）を示した上で、漢字の訓読の可能性、構成要素の配列の問題について考察した。また、チュノムに特徴的

な「会音」の例を音韻史の観点から分析し「1文字=1音節」原則の普遍性を指摘した。最後に、チュノムの方
言性についても紹介した。

それぞれの発表に関して、参加メンバーの専門とする様々な文字の見地から、自由かつ活発な討議が行われた。